

台湾人日本語学習者⁽¹⁾の「視覚型・聴覚型」 学習スタイルについて

荒井 智子

キーワード：学習スタイル, PLSPQ, SAS, 視覚型, 聴覚型

はじめに

同じ教師が、同じ教材を使って、同じ期間、日本語の授業を行っても、学習者の習熟度には差が現れる。また、コミュニケーションな活動を取り入れた授業を行っても、学習者の取り組み方はさまざま、自ら進んで発言したり、インターアクションをしたりすることを好む学習者もいれば、好まない者もいる。これは、日本語の学習に対する取り組み方、学習スタイルに個人差が関係しているからではないだろうか。

学習スタイルは、言語習得のプロセスにおいて重要な役割を持つ学習者要因のひとつである。真嶋(2005:125)が、「学習者の個人差を把握すること、または教師にその知識があることで、(中略)学習者に必要に応じて指導することにより、理屈の上では効率的な学習が進むはずである」と述べているように、教師や学習者自身が自己の学習スタイルを把握することができれば、効果的な授業計画を再考し、学習者の学習能力を伸ばすことが可能になるだろう。しかし、学習スタイルは、さまざまな個人差要因と複雑に関わっていることと、また、心理レベルと行動レベルにまたがっているために、授業中の学習者の学習ストラテジーを観察しているだけでは全面的な分析は容易ではなく、まだ定説がないようである。

先行研究では、英語学習者の学習スタイルを測定するために Reid (1987) の PLSPQ⁽²⁾ (Perceptual Learning Styles Preferences Questionnaire) と Oxford (1990) の SAS⁽³⁾ (Styles Analysis Survey) が開発され、日本語学習者にも用いられてきた。しかし、これらの調査票の信頼性を疑問視する研究者もいる(木下他 2004)。荒井(2006)では、これらの2つの調査票を用いて同じ対象者にアンケートを行った。その結果、それぞれの調査票から異なる傾向が導かれた。本研究では、荒井(2006)のデータをもとに、台湾人日本語学習者の学習スタイルを概観するとともに、これら2種類の調査票の特徴を明らかにすることを試みる。

1. 先行研究

第二言語習得研究において、学習スタイルはさまざまな定義づけがされている。Oxford (1990) は、学習スタイルとは新情報を取り込む際に学習者が好むとする学習モードで、認知スタイルとして知られる構成概念であると述べている。また、Reid (1987) は、新しい情報やスキルを取り込むとする際に、個人が自然、習性として好む取り入れ方や処理方法であるとし、「認知性」「知覚性」「性格性」の3つのカテゴリーに学習スタイルを分類している。これまでの学習スタイルに関する研究では、アンケート形式の調査票、Reid (1987) の PLSPQ と Oxford (1990) の SAS が主に使われてきた。日本語教育においてもこれらの調査票を用いて、学習者の国籍や学習環境による学習スタイルの傾向、学習者と教師の学習スタイルの違い、習熟度や海外滞在経験の有無との関連性などについて研究がされてきた¹⁾。しかし、学習者の性別や学年、日本人に接する頻度など学習者の社会的属性や個人差との関連性から分析したものは見当たらない。現在のところ、学習スタイルは生得的か後天的か、また、可変的か不変的かなどのような学習スタイルのメカニズムに関しても一致した見解には至っていない。更には、その調査票の信頼性や妥当性について研究されているものは少なく、学習スタイルに関して解明されるべき課題が多くあると思われる。

2. 研究の目的

前述のように、荒井 (2006) では、PLSPQ と SAS の2種類の調査票を使い、台湾人日本語学習者に学習スタイルの調査を行った。そして、学習スタイルの「型」ごとの平均値を合計した数値をグラフにしたところ、PLSPQ では「運動型」の平均値がもっとも高く、ついで「聴覚型」が高かったが、「個人学習型」「視覚型」の平均値は低いという結果になった(図1)。これは、戴 (2002 a) の台湾人英語学習者と英語教師に PLSPQ を用いた調査と同じ傾向を示す結果になった。そし

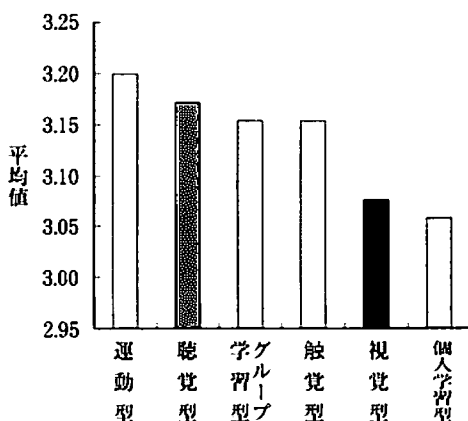


図1 PLSPQ

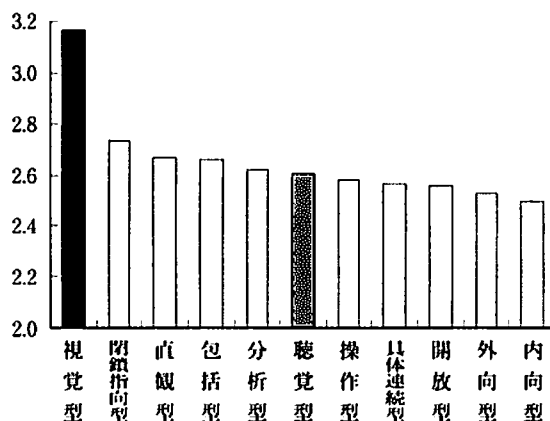


図2 SAS

て、荒井（2006）の SAS を用いた調査結果では、「視覚型」がもっとも高く、また、「聴覚型」より「視覚型」のほうが高かった（図 2）。これは、板井（2002）の香港で行った中国人日本語学習者対象の SAS を用いた調査結果とほぼ同様の傾向が示された。これらの調査から、同じ調査票を使った調査では、中国語を母語とする学習者は、目標言語や文化背景が異なっても同じ学習スタイルの傾向がみられることがわかる。

ところが、2 種類の調査票による結果を比較してみると、同じ対象者に調査をしたにもかかわらず、PLSPQ では「聴覚型」のほうが「視覚型」より平均値の合計が高く、SAS では、「視覚型」のほうが「聴覚型」より高いという傾向が導き出される結果になった。つまり、学習者の学習スタイルを PLSPQ と SAS、いずれかひとつの調査方法で決定するには問題があるのではないかと指摘できる。

本稿では、2 つの調査票のどちらにも分類されている、「視覚型」と「聴覚型」を取り上げて分析を行うことにする。そして、両調査票の質問項目内容を考察し、このような、一見、矛盾していると思われる結果が現れた原因を探る。また、「視覚型」「聴覚型」学習スタイルと学習者の社会的属性や個人差である、性別、学年、日本人に接する頻度との関連性について分析を行い、台湾人日本語学習者の「視覚型」「聴覚型」学習スタイルに関連する要因の解明を試みる。

3. データと分析方法

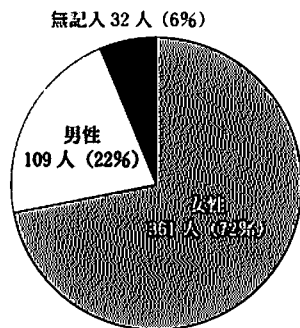
荒井（2006）の調査で得られたデータをもとに分析を行う。調査は、2006 年 5 月から 12 月にかけて、台湾の北部、中部、南部にある四年制大学で日本語を専攻とする学習者女性 361 人（72%）、男性 109 人（22%）、無記入 32 人（6%）合計 502 名にアンケートを行った（図 3：性別、図 4：学年別、図 5：日本人に接する頻度の内訳を参照されたい）。アンケートは、学習スタイルに関する 2 種類の調査票、PLSPQ と SAS の英語版を中国語に訳したものを使用した。PLSPQ は、「とても賛成」「賛成」「どちらとも言えない」「反対」「とても反対」の 5 段階選択肢、SAS は、「よくある」「しばしば」「ときどき」「全然ない」の 4 段階選択肢で回答を求めた（質問項目については表 1 を参照されたい。尚、表中の P は PLSPQ、S は SAS の項目であることを示す）。

前述のように、「視覚型」と「聴覚型」に関して、2 つの調査票で異なる傾向が見られたため（図 1、2）、本研究では、これら 2 つのスタイルを取り上げて分析を行う。

学習者の社会的属性と学習スタイルとの関連性の有無に関する分析は、統計ソフト SPSS 14.0 を用いて行う。「視覚型」「聴覚型」学習スタイルに性別による差があるかについては、ウィルコクソンの順位和検定の χ^2 検定を適用し、また、学年や日本人に接する頻度による差があるかについては、クラスカルウォリスの χ^2 検定を適用する。それぞれの統計結果は表 2、表 3、表 4 に示す。

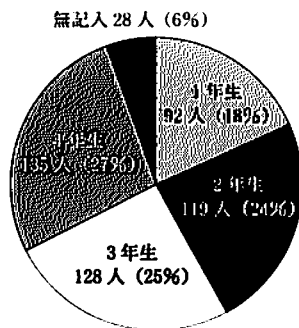
以上の方法で、PLSPQ と SAS の「視覚型」と「聴覚型」の項目の特徴と、台湾人日本語学習者の学習スタイルの解明を試みる。

表 1 は、各調査票の「視覚型」と「聴覚型」の質問項目、並びに、平均値と標準偏差である。



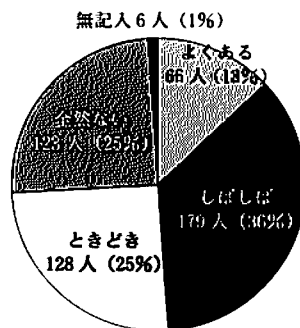
女性 361人 (72%)
男性 109人 (22%)
無記入 32人 (6%)
合計 502人

図3 性別



1年生 92人 (18%)
2年生 119人 (24%)
3年生 128人 (25%)
4年生 135人 (27%)
無記入 28人 (6%)
合計 502人

図4 学年



よくある 66人 (13%)
しばしば 179人 (36%)
ときどき 128人 (25%)
全然ない 123人 (25%)
無記入 6人 (1%)
合計 502人

図5 日本人に接する頻度

表1 PLSPQとSASの「視覚型」「聴覚型」の質問項目、平均値、標準偏差

視覚型				聴覚型			
PLSPQ				PLSPQ			
項目番号		M	SD	項目番号		M	SD
P6	教師が板書したものを読んだほうが学べる。	3.29	1.253	P1	教師の指示（助言）があったほうが理解ができる。	3.29	1.412
P10	説明を読んだほうが忘れない。	3.25	1.240	P7	クラスで誰かが自分に指示をしてくれたほうが学べる。	3.31	1.156
P12	説明を読んだほうが理解ができる。	3.32	1.343	P9	自分で読むよりも、授業を聞くほうが覚えられる。	3.28	1.292
P24	誰かの発言を聞くより、本を読むほうがいい勉強になる。	2.87	0.817	P17	教師がクラスで講義したほうが勉強になる。	3.21	1.111
P29	講義を聞くより、本を読むほうがいい勉強になる。	2.87	0.892	P20	クラスで他の人の発言を聞くといい勉強になる。	3.28	1.295
SAS				SAS			
S1	書いたほうが覚えられる。	3.15	0.922	S11	大きい声を出して話したほうが覚えられる。	2.9	0.937
S2	メモをたくさんとるほうだ。	3.40	0.834	S12	何かを読んで勉強するよりも講義やテープを聞いて学習するのが好きだ。	2.65	0.809
S3	絵・数字・文字を視覚的に覚えられる。	3.36	0.833	S13	活動するとき、口頭による指示が必要である。	3.07	0.764
S4	ビデオ、テレビなどの媒体を使って学習するのが好きだ。	3.12	0.865	S14	周りの音は、自分の思考力を助ける。	2.44	0.914
S5	読んだところの重要箇所を線をひいたり、印をつけたりする。	3.48	0.815	S15	勉強をしているとき、音楽を聞くのが好きだ。	2.41	1.102
S6	色を使うと更に学習効果がある。	3.27	0.900	S16	その人のことが見えなくても何を言っているのか理解できる。	2.20	0.752
S7	活動（仕事）の指示が書いてあるものが必要である。	3.37	0.773	S17	人がどんな様子かというよりも、言った内容を覚えている。	2.53	0.840
S8	周りの音が気になるほうだ。	3.06	0.851	S18	聞いたジョーク（笑い話）を覚えていてる。	2.34	0.813
S9	人が何を言っているのか理解するために必ずその人を見る。	3.03	0.811	S19	声でその人がわかる。	3.11	0.839
S10	自分の勉強している部屋の壁にポスターや絵が貼ってあるほうがいい。	2.23	1.014	S20	テレビをつけると、画面を見るよりも音を聞くことが多い。	2.41	0.896

4. 分析結果と考察

2つの調査票の「視覚型」「聴覚型」スタイルに関して、質問項目内容の傾向を比較した結果と、性別、学年、日本人に接する頻度と学習スタイルとの関連性について統計手法を用いた分析結果を以下に述べる。

4.1 「視覚型」と「聴覚型」の質問項目の分類

「視覚型」「聴覚型」の質問項目に関して、PLSPQは各5項目、SASは各10項目を取り上げて、各調査票の質問項目内容にどのような傾向があるか考察する。

4.1.1 「視覚型」

「視覚型」「目型」⁽⁵⁾などによばれる学習スタイルは、教科書や辞書などを使ったり、本やまんがや新聞などを读んだり、絵や文字カードやビデオ教材やテレビ番組を見て言語習得することなどの要素が含まれると考えられる。

表1にあるように、PLSPQの「視覚型」の質問項目は、板書を読む(P6)、説明を読む(P10、P12)など、「読むこと」に関する内容で構成されている。一方、SASの「視覚型」の質問項目は、メモ、字、数字、絵などを見る(S1、S2、S3、S7)、ビデオ、テレビを見る(S4)、書き込んだ線や印や色をビジュアル的に捉える(S5、S6)など、「見ること」に関する内容だと解釈できる。

調査結果において、PLSPQを用いた調査では、他の4つのスタイル「運動型」「聴覚型」「グループ学習型」「触覚型」よりも「視覚型」のほうが低かったが、SASを用いた調査結果では、11個のスタイルのうち「視覚型」がもっとも高いという結果になった。このことは、言い換えれば、台湾人日本語学習者は、読むという「視覚型」スタイルはあまり持たないが、見るという「視覚型」スタイルを持つ傾向があると言えよう。

4.1.2 「聴覚型」

「聴覚型」「耳型」などによばれる学習スタイルは、口頭による指示や説明を受けたり、テープ教材を使ったりするなどの要素が含まれると考えられる。

表1にあるように、PLSPQの「聴覚型」の質問項目は、教師による講義を聞く(P9、P17)、教師やクラスメートの指示や発言を聞く(P1、P7、P20)というスタイルであるため、「講義と指示を聞くこと」に関する内容で構成されている。一方、SASの「聴覚型」の質問項目は、声を出したり聞いたりする(S11、S12、S13、S16、S17、S18、S19)、テレビや周囲の音を聞く(S14、S15、S20)というスタイルのため、「声や音を聞くこと」に関する内容だと解釈できる。

調査結果において、PLSPQを用いた調査では、「聴覚型」は「運動型」に次いで2番目だったが、SASを用いた調査では11個のスタイルの中で6番目であった。このことは、言い換えれば、

台湾人日本語学習者は、講義と指示を聞くスタイルを持つが、音と声を聞くという「聴覚型」スタイルをあまり持たない傾向であると言えるだろう。

4.2 社会的属性や個人差との関連性

学習者の性別、学年、日本人に接する頻度が、「視覚型」「聴覚型」学習スタイルと関連性があるのかについて、統計による分析を行った。

4.2.1 性別

「視覚型」「聴覚型」は、性別によって傾向に差がみられるだろうか。「視覚型」と「聴覚型」の30項目をノンパラメトリック検定のウィルコクソンの順位と検定にかけて分析を行った。その結果、P1 (両側有意確率 $0.038 < p = .05$)、S5 ($0.000 < p = .01$)、S6 ($0.000 < p = .01$)、S7 ($0.001 < p = .01$) で、有意な差がみられた。つまり、これらの項目は性別による差があるということが明らかになった。P1 と S7 は、指示（助言）を受けることに関する内容であり、P1 は聴覚によるもので、S7 は書いたものを見て指示を受けることである。この2つの項目を単純集計したグラフ（図6、図7）によると、P1 の聴覚による指示を望むのは男性、S7 の書いたものによる指示を望むのは女性のほうが多く、指示を受ける際、男性は「聴覚型」スタイルを用いて、女性は「視覚型」

表2 性別との関連性

視覚型	P6	P10	P12	P24	P29	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10
Mann-Whitney の U	17542	18530	17445	17631	17861	18504	18110	18018	18332	15367	14176	15829	19491	18312	18595
Wilcoxon の W	82161.5	83149.5	81705.5	23516.5	23856	24498.5	24104.5	24013	24218	21361.5	20171	21715	84110.5	82573	83214.5
Z	-1.693	-0.726	-1.595	-1.399	-1.452	-0.945	-1.385	-1.424	-0.914	-4.128	-4.794	-3.2	-0.064	-1.035	-0.819
漸近有意確率(両側)	0.091	0.468	0.111	0.162	0.146	0.344	0.166	0.154	0.361	0.000	0.000	0.001	0.949	0.301	0.413

聴覚型	P1	P7	P9	P17	P20	S11	S12	S13	S14	S15	S16	S17	S18	S19	S20
Mann-Whitney の U	17082	18188	18443	17244.5	17739.5	19246.5	18325	19512.5	19278	18112.5	19257.5	19119.5	18656.5	17801	18951
Wilcoxon の W	81702	82808	82704	81864.5	82359.5	25241.5	24320	25507.5	25273	82732.5	25252.5	25005.5	24651.5	23796	83571
Z	-2.079	-1.15	-0.896	-1.944	-1.538	-0.271	-1.074	-0.046	-0.245	-1.219	-0.273	-0.091	-0.77	-1.519	0.528
漸近有意確率(両側)	0.038	0.250	0.370	0.052	0.124	0.786	0.283	0.963	0.807	0.223	0.785	0.927	0.441	0.129	0.598

a. グループ化変数: 性別

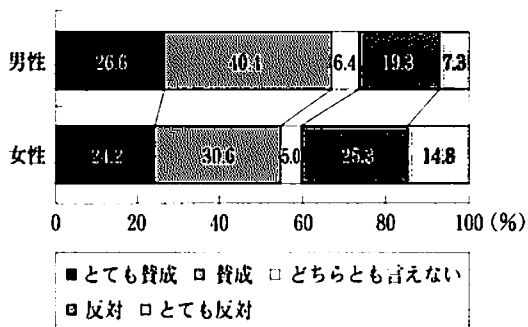


図6 P1 - 性別

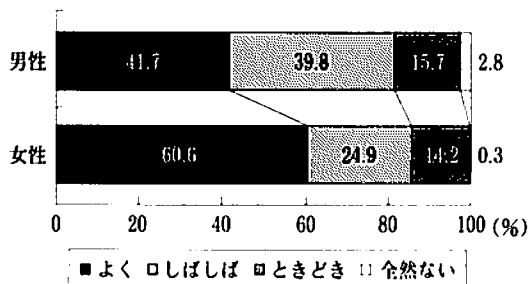


図7 S7 - 性別

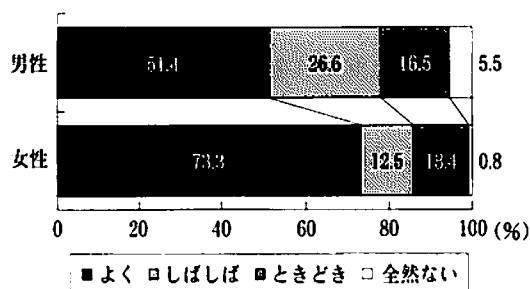


図8 S5—性別

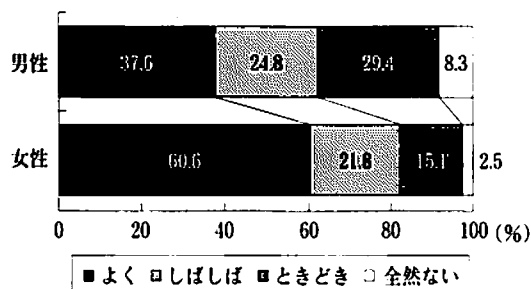


図9 S6—性別

スタイルを用いる傾向があると言えよう。また、図8と図9に示されるように、S5（線をひいたり印をつけたりする）とS6（色を使う）に関して、女性のほうが男性よりもそれらのスタイルを持つ傾向があることがわかった。

4.2.2 学 年

次に、学年によって、「視覚型」「聴覚型」というスタイルに差がみられるのかを調べるために、ノンパラメトリック検定のクラスカル・ウォリスの検定を行った。その結果、S2（両側有意確率 $0.035 < p = .05$ ）、S5（ $0.035 < p = .05$ ）とS9（ $0.002 < p = .01$ ）で有意な差がみられた（表3）。しかし、これら以外の27項目では有意差がみられなかった。S2（メモをとる）もS5（線を引いたり印をつけたりする）も「視覚型」スタイルに関する項目であるが、どちらも書くという動作を含んでいることがわかる。よって、これらの項目に関しては、書くスタイルとの関連性について更に分析を行う必要がある。

以上から、「視覚型」や「聴覚型」という学習スタイルは、学年による差がほとんど認められず、学習段階が上がっても「視覚型」「聴覚型」スタイルは変化しにくいということが言えよう。

表3 学年との関連性

視 覚 型	P6	P10	P12	P24	P29	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10
カ イ 2 乗	3.717	2.007	4.373	3.987	1.819	6.432	8.584	1.239	4.322	8.603	6.403	0.948	7.749	14.433	3.119
自 由 度	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
漸 近 有 意 確 率	0.294	0.571	0.224	0.263	0.611	0.092	0.035	0.744	0.229	0.035	0.094	0.814	0.051	0.002	0.374

聴 覚 型	P1	P7	P9	P17	P20	S11	S12	S13	S14	S15	S16	S17	S18	S19	S20
カ イ 2 乗	3.327	4.518	4.064	5.516	1.691	5.416	5.268	7.375	2.258	0.558	3.240	3.282	3.480	2.684	6.911
自 由 度	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
漸 近 有 意 確 率	0.344	0.211	0.255	0.138	0.639	0.144	0.153	0.061	0.521	0.906	0.356	0.350	0.323	0.443	0.075

a KruskalWallis 検定

b グループ化変数：学年

4.2.3 日本人に接する頻度

最後に、日本人との接触頻度と学習スタイル「視覚型」「聴覚型」の関連性について、ノンパラメトリック検定のクラスカル・ウォリスの検定を行った。その結果、PLSPQの「視覚型」におい

でも、「聴覚型」においても、有意な差がみられた（表4）。

また、「読むスタイル」と「講義や指示を受けるスタイル」に関する項目、P6、P10、P12、並びに、P1、P7、P20において、日本人に接する頻度による比較を行った（図10～15）。それによると、日本人と接触する機会が少ない学習者のほうが、「読むスタイル」「講義や指示を受けるスタイル」を持つことがわかる。このことは、日本人に接触する機会が多くなれば、他者の指示や講義や視覚的な説明に頼るよりも、自分で読んで学習したり考えたりするスタイルを持つと言える。以上から、日本人との接触頻度の多少が、「視覚型」「聴覚型」学習スタイルと何らかの関係があると言えるだろう。

表4 日本人に接する頻度との関連性

視覚型	P6	P10	P12	P24	P29	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10
カイ2乗	39.143	35.195	40.276	5.795	11.888	1.306	2.321	3.937	13.792	4.261	5.077	4.037	1.706	2.898	2.485
自由度	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
漸近有意確率	0.000	0.000	0.000	0.122	0.008	0.728	0.509	0.268	0.003	0.235	0.166	0.257	0.636	0.408	0.478

聴覚型	P1	P7	P9	P17	P20	S11	S12	S13	S14	S15	S16	S17	S18	S19	S20
カイ2乗	50.068	41.512	35.053	37.945	23.151	0.349	3.088	3.685	4.720	0.860	0.198	1.607	3.054	0.630	4.145
自由度	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
漸近有意確率	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.951	0.378	0.298	0.193	0.835	0.978	0.658	0.383	0.890	0.246

a KruskalWallis検定

b グループ化変数：機会

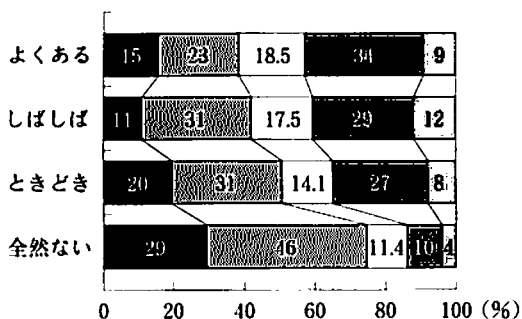


図10 P6－機会

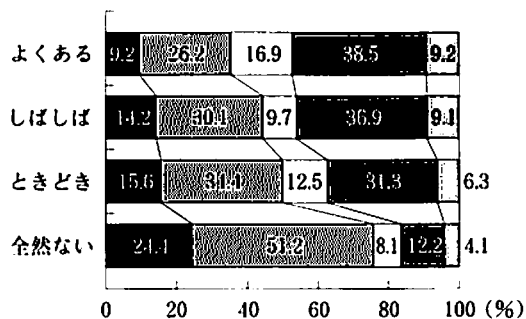


図11 P10－機会

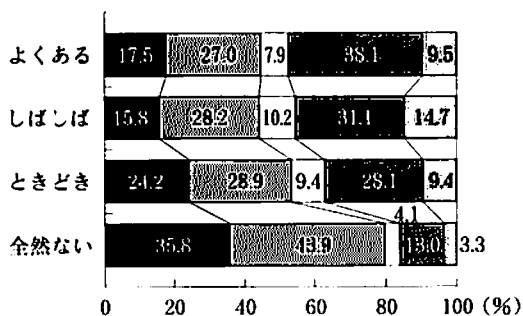


図12 P12－機会

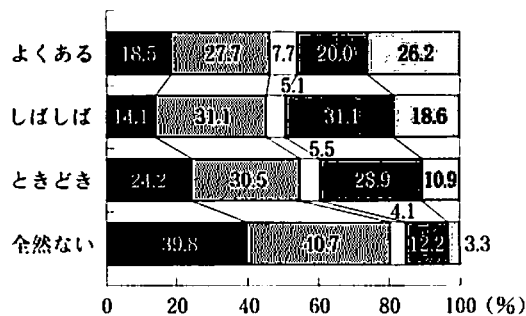


図13 P1－機会

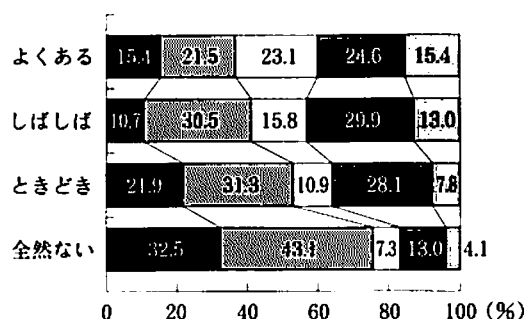


図 14 P7 - 機会

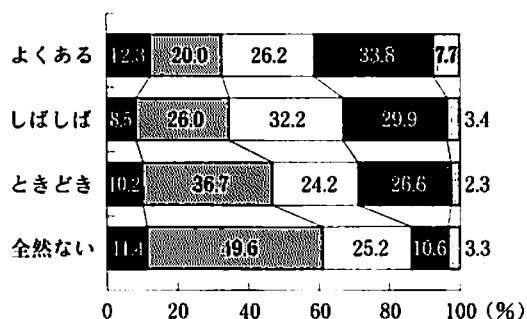


図 15 P20 - 機会

■ とても賛成 □ 賛成 □ どちらとも言えない ■ 反対 □ とても反対

5. まとめと今後の課題

本研究で、以下のことが明らかになった。

- (1) 「視覚型」スタイルに関して、PLSPQ は「読むスタイル」で、SAS は「見るスタイル」についての項目である。また、「視覚型」スタイルに関しては、PLSPQ は「指示や講義を聞くスタイル」、SAS は「音や声を聞くスタイル」についての項目である。
- (2) 台湾人日本語学習者は、「見るスタイル」と「指示や講義を聞くスタイル」を持つ傾向がある。
- (3) 台湾人日本語学習者の「視覚型」「聴覚型」学習スタイルは、性別や日本人に接する頻度と関連性が見られるが、学年との関連性はほとんど見られない。

本研究では、台湾人日本語学習者の「視覚型」「聴覚型」学習スタイルの傾向をある程度明らかにすることができた。しかし、学習スタイルを全体から捉えるには、例えば「書くスタイル」「話すスタイル」など、多角的な視点で分析する必要がある。また、日本語の学習で行われる、文章の音読、辞書や参考書の使用、グループ活動に対する取り組み方、更には、授業の課題に関する学習とそれ以外の学習の取り組み方などを問う項目が、PLSPQ や SAS にはほとんどない。日本語教育における学習スタイルを測定するためには、既存の英語学習者のために作られた測定法ではなく、日本語教育に合った信頼性のある調査票を作成することが求められる。今後、更に分析と考察を行い、日本語学習者の学習スタイルを明らかにすることを目指し、学習スタイルを考慮した日本語教育指導法改善の指針を得たいと考える。

〈注〉

- (1) 台湾には、初等・中等・高等教育機関、語学学校などにおいて日本語教育が行われている。また、高等教育機関では、第二外国語として日本語の授業を受けている学習者もいる。学習者全体の占める割合から、本稿では、台湾の四年制大学で日本語を主専攻とする学習者を調査の対象とした。
- (2) 6 個の学習スタイル「視覚型 Visual」「聴覚型 Auditory」「触覚型 Tactile」「運動型 Kinesthetic」「グループ学習型 Group」「個人学習型 Individual」に分類されている。質問項目は、スタイルごとに

各5個、合計30個。

- (3) 11個の学習スタイル「視覚型 Visual」「聴覚型 Auditory」「操作型 Hand-on」「外向型 Extroverted」「内向型 Introverted」「直観型 Intuitive」「具体連続型 Concrete-sequential」「閉鎖指向型 Closure-oriented」「開放型 Open」「包括型 Global」「分析型 Analytic」に分類されている。質問項目はスタイルごとに各10個、合計110個。
- (4) PLSPQを用いたものは、谷口(1990) 蔵(1992) 木下(2004) などがあり、SASを用いたものには、江原(1998) がある。
- (5) 谷口(1990)によると、「目型」「耳型」は学習モードのことで、目型とは視覚型情報(例:文字、絵)をインプットとして学習する者で、耳型とは音声によるインプット(例:教師の話、音声テープ)をもとに学習を進める者である。

参考文献

- 荒井智子(2006)「日本語学習者の学習スタイル——台湾人大学生の場合——」2006年度日本語教育学会春季大会予稿集 67-72
- 板井美佐(2002)「香港における中国人学習者の学習スタイルに関する調査(The Language Learning Styles of Chinese Learners in Hong Kong)」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』17 筑波大学留学生センター 61-79
- 伊東祐郎(1999)「学習スタイルと学習ストラテジー」宮崎里司、ネウストブニー共編『日本語教育と日本語学習』くろしお出版 133-145
- 江原有輝子(1998)「日本人日本語教師とメキシコ人学習者の学習スタイルの違い」『日本語教育』96, 13-24 日本語教育学会
- 岡崎眸, 岡崎敏雄(2001)『日本語教育における学習の分析とデザイン 言語習得過程の視点から見た日本』凡人社
- 尾関直子他(2005)『言語学習と学習ストラテジー』大学英語教育学会(JACET)学習ストラテジー研究会リーベル出版
- 甲斐ますみ(1995)「台湾における新しい世代の中の日本語」『日本語教育』95, 135-150
- 木下直子(2004)「日本語学習者の知覚学習スタイル——韓国大学生の場合——」『明海日本語』第9号, 41-50
- 木下直子, クリス・シェパード, 小池圭美, 静谷麻美, 遠山千佳(2004)「学習スタイル調査研究——信頼性のある調査質問紙の検討——」2004年日本語教育国際研究大会予稿集1 191-196 日本語教育学会
- 工藤節子(2004)「教師の自己成長を促す授業改善——新聞読解の授業をもとに——」『東呉外語学報』19, 300-322
- 呉致秀(2003)「日語学習動機、学習態度と学習成效之研究」『東呉日語教育』第二十六期 1-25
- 銭芳美(2002a)「EFL教師と成人学生教員/学習形態嗜好之探討」『修平学報』第四期 136-165
- 銭芳美(2002b)「目前技術學院成人學生英文學習形態嗜好之比較研究」『嶺東學報』第十五期 380-396
- 竹内理(1999)「『学習スタイル』と『外国語学習方略』: 実証的研究をもとにして」関西大学視聴覚教育[編]
- 竹内理(2003)『より良い外国語学習法を求めて 外国語学習成功者の研究』松柏社
- 谷口すみ子(1990)「初級日本語学習者の学習スタイルの調査」『日本語教育』71, 197-209 日本語教育学会
- 橋本洋二, 平田マチ子, 田崎和子(1999)「『コミュニケーション』な教室活動に対する学生の受けとめ方——COLTによる中国系・非中国系学生の比較——」『日本語教育』103号 日本語教育学会 89-98
- 服部美貴(2002)「台湾の日本語学習者の言語学習の「確信」について——台湾大学の学習者場合——」東京家政学院筑波女子大学紀要第6集 169-183
- 福田倫子(2004)「日本語教育における聴解研究の展望」『広島大学日本語教育研究』14号 73-79
- 真嶋潤子(2005)「学習者の個人差と第二言語習得——「学習スタイル」を中心に——」『第二言語としての

『日本語の習得研究』8号 115-134 第二言語習得研究会

村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館

Oxford, R. L. (1990) *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York: Newbury House.

Reid, J. M. (1987) The perceptual learning style preferences of ESL students. *TESOL Quarterly*, 21, 1, 87-111

『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究海外調査報告書』平成 18 年独立行政法人国立国語研究所 日本語教育部門

2004 財団法人交流協会『平成 15 年度「台湾における日本語教育事情調査」報告書』